

ディスカッション

言語学 Café

- ある兄妹の言語学談義 (3) -

宮下博幸・久保さやか

I えらいこっちゃんの巻

いつものカフェ。兄はなにやら険しい表情でノートパソコンの画面をにらみつけている。そこに妹がやってきて兄の向かい側に座る。

妹：なにやってるの？

兄：か、書けない。だめだ。今日の夕方4時までこの原稿を仕上げなきゃいけないんだ。それなのに突然なーんにも発想が浮かばなくなった。どうしよう。と、とにかく邪魔しないでくれ。

妹：ふうん。(いつもどおり昆布茶を注文し、兄の様子を観察する。)

兄：ところで、お前もレポートかなんかがある、って言ってたけど、もう終わったの？

妹：書きすすめるといろいろと欠陥が見つかって、なかなか提出にいたらないんだけど、でも先生まだ待ってくれそうだから。

兄：まだ余裕があるってわけか。うらやましい。

妹：そう。でもこの前テストがあったときは私も大変だった。久しぶりに徹夜しちゃったもんね。

兄：ああ、あのときね。鬼のような形相してたもんね。近寄らないでおこうって思わせるような。

妹：うるさい。ま、とにかく今回は兄さんの方がえらいこっちゃんだから。がんばってね。(意地悪く笑う)

兄：え、えらいこっちゃんだから？では、またまたここで問題。「え

らいこっちゃだ」という表現について、説明してください。

妹：お、またきたっ。でも大丈夫。国語辞典持ってるから。まず「えらい」を調べて見ると...

人柄や行為が立派ですぐれている。

「よく努力した。たいへんえらい」

地位・身分が高い。

「えらい人の視察」

程度が甚だしい。

「えらく冷える」

とんでもない。思いもよらない。

「えらい目にあう」

の4つの意味があるらしい。このうち は形容詞を強めるものだから、この場合には当てはまらない。 と は兄さんの人となりを考えれば、有り得ない。うそうそ。この場合の「えらい」は人じゃなくて「こと」を修飾してるわけだから、 と のような人にまつわる性質を示すものは関係ないよね。従って ってことになる。形容詞って、それがかかる名詞によって意味が変わるんだね。

1) えらい兄さんが来た

というと の意味だね。

2) えらい! 兄さん

にすれば の意味にもなるかな。 はねぎらいの機能があるから、付加的には用いられないと思う。無理矢理 の意味で作ろうとすると

3) えらく兄さんの

…。なんか嫌だなあ。

4) えらい物をもらってしまった

というところ。富山方言だと、「しんどい」という意味で使うこともあるよ。「えらて、えらて、も～かなわんちゃ」という風に。

兄：たくさんの解説と変な例文ご苦労様。でも実は質問の意図とずれてる。

妹：あれ？兄さんは「えらい」の意味がわからないのかと思った。「えらい」って言葉には無縁の人だから。

兄：ばか者。俺様がその程度の質問をすと思ってるのか。

妹：「えらく」はないけど「えらそう」ではあるね、兄さん。

兄：もちろん。それだけで俺は満足である。

妹：えっと。それじゃやり直し。「えらいこっちゃ」は関西方言だから、とりあえず標準語にしてみると「えらいことだ」になるよね。で、これをもとの文に当てはめて見ると

5) 兄さんの方がえらいことだなんだから

なんだか変だね。これがどうして変かを説明すべきだったの？

兄：そのとおり。じゃどうして「えらいこっちゃ」は大丈夫で、「えらいことだ」にすると変なのか。

妹：関西方言の形の「えらいこっちゃ」のほうは、そのまま慣用句化してしまってるせいなんじゃないの？

兄：じゃどうして関西方言の形で慣用句化するとOKなんだ？

妹：えーと…。

兄：少し文法的に考えてみよう。俺がお前の表現で変に思ったのは、実は「えらいこっちゃ」という発話が、普通は名詞的な要素とともに現れる「(なん)だ」とともに使われていること。これは普通できないことだよ。例えば

6) 走れなんだから

7) チョコレート食べたいんだから

8) 足が長いんだから

このような制限があるにも関わらず、なんとお前はその制限を見事に打ち破り、きわめて創造的な表現を生み出したのであった。でももし上のような表現はあんまり良くないけど、「えらいこっちゃなんだから」だったら OK と言うのであれば、そこにはそれ相応の理由ってのがあらんじゃないか。その理由は何かを説明してください、というのが質問の意図だったわけ。その前に質問。他に「えらいこっちゃ」の部分に置き換えられる表現ってある？

妹：難しいなあ。万事休す。

兄：えっ、もうお手上げなの？

妹：あ、「万事休す」って表現はどうか。こんなときインターネットって便利だね。ありそうな表現を検索すれば、実際に使われているかどうか調べられるよ。(兄のパソコンで調べ始める)

9) 白が3と打つと黒はなお4とあがきますが、白が5と打つと万事休すです。

10) でも、これがようやく改革のスタートであり、これで万事休すなわけじゃない。

あとは、「なんてこった」、「なんじゃこりゃー」、「おーまいがー(英語の"Oh my god!")」なんてどうだろ？

(11) も～なんだかこの物入りの時期になんてこっただわあ。

(12) もう気持ちは「なんじゃこりゃー」なんですけど

(13) おーまいがー、だな…。たいがいにしる。

上の例にもあるけど、検索してみた限りでは、「万事休す」以外の表現はかぎカッコや句読点で目印がつけられてるのが多かった。「万事休す」以外は、慣用句というより口語調のセリフだから、普通にかぎカッコなしで文中に入れるのは抵抗があるのかな。

またこれらの例文は、「『万事休す』といった状態」や「『なんてこった』と言いたい状況」のように言葉を補えるから、問題の表現はそれ自体で何らかの状況を表す名詞として扱われてるみたい。さらに付加形容詞のように用いられてる文もあるよ。

- 14) 男は万事休すな状況へ追い込まれた。
- 15) 作者と愛車に起こった“なんてこった”な事件について
- 16) なんじゃこりゃーなシャツを着ている。
- 17) 我が課のページもおーまいがーな状態なもので

「えらいこっちゃ」の付加的用法もあったよ。

- 18) 髪の毛が暴風の中で、とんでもなくえらいこっちな状態。

兄：付加の用法があるってことは、上の推定上の終止形「なんてこっただ」「なんじゃこりゃーだ」「おーまいがーだ」はいわゆる形容動詞だってことだよ。それと例を見ると、どうやら関西方言ってのはこの使い方ですれほど重要じゃないみたいだね。「おーまいがー」だってあるんだし。

妹：そういうことになるね。

兄：あと、慣用句ってのもどうかな。これはちょっと難しい問題が入り込んでくるね。そもそも慣用句とは何かってこと。「なんてこった」「なんじゃこりゃ」「えらいこっちゃ」は慣用句？

妹：ん...なんか違うよね。

兄：そう。典型的な慣用句ってのは、意味が文字通りの意味から類推できないものだよ。こういう見方をするなら、例えば「なんてこった」は「なんということだ」のくだけた形ということでそれぞれの構成要素から意味がとれると言えなくもない。この点、おまえの言うように「万事休す」は確かに違う。これは現代日本人にとって間違いなく慣用句だよ。まあ慣用句かどうかについてはとりあえずおいとくとして、ここでまた質問あり。じゃあ「えらいこっちゃ」の部分に入る表現には、何か共通点があるかな？

妹：兄さんがさっき言ってたけど、それらの表現が形容動詞として現れているってことは、つまりそれが何か状態を表しているということだよな。「えらいこっちゃ」や「なんてこった」、「なんじゃこりゃー」、「おーまいがー」はもちろん、何かの状態を表しているのではなくて、本来はむしろある状態に対する評価や反応の発言。でも、そこから状態そのものを指すようになったんじゃないのかな。「そういう評価・反応(を引き起こすよう)な状態」といった具合に。

兄：そうだろうね。状態と解釈可能だからこそ、そういった表現が「～な」といっしょに出て来れるんだろうな。むしろ「～な」といっしょに使われることによって、状態として解釈されることが強いられるとも言える。

妹：うん。さらに言うと、「えらいこっちゃ」などなどはイントネーションを伴った音声の形で想像できることが必要条件じゃないかと思うんだけど。例えば「えらいこっちゃ」に相当する標準的な発言、「大変だ」を18)の例文に入れてみると、

18') 髪の毛が暴風の中で、とんでもなく大変だな状態。

これだとなんだか変だけど、音声を想像しやすくするためにかぎカッコや感嘆符を入れると、

18'') 髪の毛が暴風の中で、とんでもなく「大変だ！」な状態。

どう？ ちょっと容認度が増さない？

兄：確かにすこしましになる気がするね。

妹：ということは、一連の「えらいこっちゃ」や「なんてこった」、「なんじゃこりゃー」、「おーまいがー」はくだけた文体であることが、かぎカッコや感嘆符の役割を果たしている。つまり、音声を想像しやすくする働きがある、ということなんじゃないかな。なかでも「えらいこっちゃ」は関西方言、「なんじゃこりゃー」は某俳優の有名なセリフ、「おーまいがー」は英語の表現であることが、その効果を増強してるみたい。

兄：お前が言っている「音声が想像しやすい」ってことが意味するのは、結局その表現が、その発話が行われる実際の場面に結びついているってことだよ。そうすると次のように言えるかな。形容動詞は状態を表す表現がふつうは名詞で出てくることが決まっている。だから本当は文のようなものがその場所に出てくるのはおかしい。けれど、括弧や、方言的な要素などの表現自体の性質によって、その部分は単なる内容伝達とは違って、発話の場面と結びついた表現ですよ、発話の場面を想像してくださいよ、そのときの状態ですよ、ということが示されると、文相当のものが出てきてもそれほど悪くなくなることになるね。これは重要な発見だと思うな。ではこれを応用した次の例はどうか？

19) そのとき「走れー！」な気分になった。

20) なんだか「チョコレート食べたーい！」な感じがするなあ。

21) あの人「足がながーい！」な外見だよ。

22) 「あとはどうなっても知らないよー！」な気持ちでその場を去った。

妹：ちょっと無理矢理な感じがするね。「えらいこっちゃ」などと比べるとこの4つは、なんというか、有名さが足りない気がする。だから受け取り側にとっては、それらの表現が意図するところの状態を特定するのが難しいんじゃないかな。しかも19)～21)の表現は「走る」や「チョコレート」、「足」が入ってることで使われる場面が極端に限定されているし。例えば19)の文の「走れー！」をもう少し幅広く使える「頑張れー！」に置きかえると

19') そのとき「頑張れー！」な気分になった。

ちょっと容認度UP、でしょ？それから22)の「あとはどうなっても知らないよー！」も、もしもその表現が、例えば漫才師のおきまりのセリフで有名だったらいいんじゃないかな。それが慣用語の「あとは野となれ山となれ」に置きかえて

22')「あとは野となれ山となれ」な気持ちでその場を去った。

にすれば OK じゃない?あと20)は、もし、あるチョコレートの
コマーシャルで「チョコレート食べたーい!」という表現が使われ
ていて、そのときのシチュエーションや言い方が独特で、流行語と
してあちこちで使われるようになったというのだったら、ありえな
くもないかな。それでも、それが使える状況はチョコレートが食べ
たくなるときに限定されてしまうので、あんまり良くない。「食べ
たーい!」の部分だけが残って、チョコレート以外の物を食べる
ときにも使われる、ってことならさらにありえそう。有名なセリフや
慣用句などのように、どの部分も交換不可能で、文やフレーズが丸
ごとそのままの形で広く認められているものでないと、形容動詞を
作ることは難しい、ということかな。それに1つの単語のように1
つの状態に対応してないといけない。20)と21)は特に、交換
可能な部分がある上に、一つの単語が表す状態としては情報が多
すぎるね。

兄:さすがに、「えらいこっちゃだ」式の表現の使い手だけあって、い
いこと言うね。さらにこんな例も発見。

(23)彼がこの世に誕生してくれたことは私たちにも「やった
ー!」な出来事であったのよね。

(24)きゃー うそー まじー それってドラマみたいじゃん な
出来事

(25)アラステキな出来事

どれも何らかの形で、引用的に使われていることが示されている。
こういう文を読み上げるときには、おそらく引用部分は実際それを
発話する場面のような口調で発音するほうがいいよね。「きゃー
うそー まじーそれってドラマみたいじゃん」・・・な出来事ってふ
うに。

妹:お願い。気持ち悪いからやめて。

兄：真に迫る演技だろ。でもこういった例を見ると、必ずしも「慣用句」や有名な人のセリフってわけでもなさそうだよね。もう少し広げてこういうのをひっくるめて「定型句」っていうといいかもね。「定型句」とは、特定のコミュニケーションの場面と結びついて比較的よく使う表現、としよう。本来そのような表現でないものも、お前が言ったようにコマーシャルなんかで場面との結びつきが作り出されて「定型句」になることもある。そういう段階になっているものは、「～な」と出てきやすい、ってこと。

妹：そういう用語があると便利だね。

兄：あと OK なものに共通する特徴がさらにありそう。それはさっきお前が言ったことにヒントがある。ちょっと違う言葉で言うと、「～な」といっしょに出てくる引用的な部分が、どれもある状況に対して出てくる反応だってこと。「えらいこっちゃ」も「おーまいがー」でも「頑張れー」でも「アラステキ」でも、容認度が高いのはある状況が目の前に存在して、それに対して反応してるんだよね。ところが

19) そのとき「走れー！」な気分になった。

20) なんだか「チョコレート食べたーい！」な気分。

21) あの人「足がながーい！」な外見だね。

22) 「あとはどうなっても知らないよー！」な気持ちでその場を去った。

なんかではそういう先行する状況を想定するのが難しいよね。このあたりも上の例があんまりよくないのと同様だと関係しているとも考えられる。つまりまとめると、「えらいこっちゃだ」式の表現が可能な場合は、「えらいこちゃ」の部分が発話の場面と結びついた、会話っぽい表現であり、それには定型性があるってことと、さらにその部分が意味的にみて先行状況に対する反応の表現であることが必要だ、ってことかな。そしてこういう表現が「～な」といっしょに出てくるときは、それが状態と捉えられる場合だ、ってことも追加しておいていいかな。

妹：はい、よくできました。めでたしめでたし。

兄：「めでたしめでたし」な結末だね。

妹：ところで、兄さん、今何時か知ってる？3時だよ！

兄：！（声にならない）もーおまえと話してるから…

妹：じゃ、そろそろ帰るね。がんばって。

兄：わー！！えらいこっちゃー！

否定辞が無いのに否定？の巻

昼下がりのカフェ。兄はエスプレッソ、妹は昆布茶を注文する。妹が話しかける。

妹：ねえねえ、こないだの原稿、無事提出できたの？

兄：人間、追い詰められるとなんとかなるもんだね。あのあと突然ひらめきがあって、奇跡の大逆転。一時はどうなることかと思ったけど。やっぱり日ごろの積み重ねのなせる業かな。

妹：なーんだ、つまんない。

兄：なんか言った？でもやっぱり日ごろからいろいろネタを蓄えておかないとだめだな、いざというときに使えるようなのを。ってことで早速相談だけど、何か面白そうな言語学のネタ、知らない？

妹：うーん。そうねえ。そういえば兄さん、ノルウェー語（ブークモール）でこんな表現があったよ。

1)De har alle sine grunner for å dra, men et felles mål om å oppleve noe de sent vil glemme.

英語直訳：

They have all their reasons to travel, but one common purpose to experience something they will forget late.

「彼らが旅に出るには銘々の理由があるが、一つの共通の目的があ

る。それは忘れられない何かを経験することだ。」

問題はこの最後の部分。直訳すると「あとで忘れる何か」になってしまうから、日本人としては「な～んだ、結局は忘れちゃうの？」って思ってしまうわない？それで思い出したのが高校英語でおなじみの

2) He is the last man I want to see.

という表現。もちろん「彼は私が一番会いたくない人だ」という意味でしょ？でも文字通りに訳すと「彼は私が会いたい最後の人」。だから、なんだか「彼以外にはもう誰とも会いたくない、と思うぐらい会いたい人」ってな感じにとれない？「俺にはおまえが最後のおんな～」っていう歌詞もあるくらいだし。

兄：音、外れてないか？

妹：と、とにかく、否定を表す単語は全然使われてないのに否定的な意味になってると思わない？この「最後の人」流の表現はドイツ語にもノルウェー語にもあるね。これって「あとで」とか「最後の」とかの系統の単語がもつ性質によるのかな。

兄：関係しているのは、そういう単語だけなのかな。英語やドイツ語なんかでは副詞が否定辞なしでも否定の意味になるけど、そういうこととも関係している気がするけど。

妹：え、それって「めったに～ない」とか「ほとんど～ない」とかに相当する副詞のこと？へー、そうか。

兄：そうそう、そういうやつ。でもどんなふうに関係しているのかは不明。

妹：そんな、無責任な。期待しちゃったじゃない。あと、この前の「言語学カフェ」の話題とも関係あるかなあ。「～以下しかない」ってやつ。ええと、英語では I have less than three books と、存在さえすれば否定にしないけれど、日本語だと規準より少なければ、否定文にしなければいけないよね。「否定」に対する態度が違うことが何か関係しているのかな。

兄：ふむ。(エスプレッソをすする)

妹：ズー（昆布茶をすする）。とりあえずざっと否定の副詞を集めてみますか。

「めったに～ない」

英語 seldom, rarely ドイツ語 selten ノルウェー語 sjelden

「ほとんど～ない」

英語 hardly, scarcely ドイツ語 kaum ノルウェー語 neppe, knapt

「決して～ない」

英語 never ドイツ語 nie ノルウェー語 aldri

最後の「決して～ない」は、歴史的に見れば否定辞を持ってるものばかりのようだね。英語とドイツ語には昔の否定辞 ne の名残が見られるけど、ノルウェー語のほうは一見無関係に見えるよね。でもこれはノルド祖語の再建形、*ne（否定辞）aldri（「時」与格）gi（「何か」）から否定辞が落ちたものなんだった。最後の gi という部分がどうなったかは、手もとにある本には明確には書いてないんだけど、アイスランド語には母音の形で残っているみたい。いずれにしても、否定辞が落ちたってことは確か。ということで、ノルウェー語も「決して～ない」のときには否定辞と関係してる。

兄：じゃあ、ノルウェー語の「ほとんど～ない」の neppe はどうなんだ？
この ne-も否定辞の名残じゃないの？

妹：それはもう一つの knapt と同じ語源から来ていて、neppe のほうは語頭の k が落ちた形だそう。だからここに集めた語を見る限りでは、「決して～ない」の場合だけ、語形成に否定辞が絡んでる。

兄：ふーん。確かに意味的に考えても、「決して～ない」は他のものとちょっと違ってているね。「めったに～ない」「ほとんど～ない」はどちらもまったくないわけじゃないよね。「たまに」はあるわけだ。ところが「決して～ない」の場合は、「ない」んだよね。「決して」は「ない」ことをたんに強めているにすぎない。そのあたりが、「決して～ない」が昔の名残をとどめやすい原因なのかもね。

妹：そうかもね。でもさあ、ノルウェー語のように最初は否定辞と一緒に用いられていたのに、そのうち否定辞の方が消えてしまう、って

のは面白いね。フランス語の pas も ne なしで否定になることがあるみたい。pas はもともと否定を強める働きしかなかったのに。ノルウェー語のごく普通の否定辞 ikke も、フランス語と同じようにももとは否定を強める「全然」だったのが、否定辞 ne が落ちて否定辞になったみたいだよ。

兄：その ikke 自体はどういう意味だったんだ？

妹：ノルド祖語では*ne（否定辞） eitt（「一つの」） gi（「何か」）だったって。これは確かドイツ語の nicht の語源と同じ構造だったと思うよ。ところで、日本語の「全然～ない」の「全然」は今や一人歩きしてるけど、否定の意味は含んでないよね。否定辞といっしょに使われていたものが、単独で使われるようになったっていう発達の手順は似てるのね。

兄：そうだね。でも発達を見ていると「全然～ない」系と「めったに～ない」系は区別するほうがいいようだね。

妹：そうね。じゃあ今度は「めったに～ない」系について。日本語には、「めったに～ない」って言いたいときに単独で出てこれるような副詞はないよね？

兄：ちょっと思い浮かばないな。ヨーロッパ語のその類の副詞を翻訳にする場合には、日本語ではいつも「～ない」が必要みたいだね。いろいろ問題が出てきたな。しかし、今出てきたノルウェー語の例にしても、the last man にしても、seldom なんかの副詞にしても、肯定表現で否定の意味になるって点で共通点が見られるね。日本語とヨーロッパ語はこの点で大きく違って。いわば日本語型とヨーロッパ語型があるってことかな。この背後にはなにかが隠れていそうな気配。それじゃ一つずつ考えてみよう。まず英語の例から見ていこうか。英語の

2) He is the last man I want to see.

は日本語にすると否定的になるってことだったけど、じゃあ次のはどうだろう。

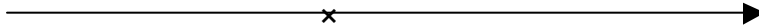
3) He was the last man I saw yesterday.

妹：この場合は別に否定の意味じゃないね。日本語でもそのまま「彼は私が昨日会った最後の人だった」って訳せる。

兄：ってことは、こういう形式だからといって、必ずしも否定になるってわけじゃないってことだ。じゃあ 2) の例はどうして否定的に解釈されちゃうんだろうね。

妹：2) と 3) の違いは、the last man を目的語にとる関係文内の動詞が want to か過去形か、というところだよ。want to の内容になれるのはまだ起こってなくて、単に望んでいるだけの出来事だから、二つの文の違いは、see という動作が起こった (過去形) か、まだ起こってないか (want to) ということね。これが解釈に影響してるんだね、きっと。時間を軸にとって考えてみると

last 3) **基準点** last 2)



3) の過去の last は「基準点が一番近い」という意味になるけれども、2) のまだ起こってない last は未来にどんどん先送りにされてしまうわけね。関係文が過去なら、時間軸からして 3) の解釈がすぐ出てくるけど、2) のように未来のときには 3) の解釈は出てきにくくなる。

兄：つまり関係文の内容が未来的な出来事のとときに、英語では否定的な解釈が出てくるってことだね。ではつぎに関係文が未来の事柄をあらわす場合について、日本語の例を見てみよう。そこから英語の特徴もわかってくるんじゃないかな。例えばお前がさっき歌った歌の文句がいい。それをちょっと変形させると

4) お前はおれが付き合いたい最後の女なんだ。

になる。この文でも英語の関係文に当たる連体節は未来のことだよね。でもこの例は英語のような否定的なニュアンスにならないんだった。

妹：この文は二つの解釈ができるね。「お前は、他の恋愛を経験した後で、最後におれが付き合いたい女なんだ」と「おれが付き合いたいと思うのはおまえが最後で、この先他の誰とも付き合いたいと思わない」って解釈。歌の中の解釈はもちろん後者のほうよね。もし前者だったら言われたほうはちょっと複雑な心境ね…。

兄：そうだね。それじゃ、こういった解釈はどんな過程を経て出てくるんだろうか。二つの解釈は何らかの推論の結果、出てきているはずだよ。まずは一つ目の解釈の場合。ある人が

4) お前はおれが付き合いたい最後の女なんだ。

と言ってるときに、「まだ女と付き合う機会は最後じゃない」とその発話者が考えているっていう背景知識があると、

まだ付き合いたくない

って含意が生じてくる。この解釈の場合は「お前はおれが最後の最後に付き合いたい女だ」って風に言い換えられるね。次は二つ目の解釈の場合。この解釈は、例えばこの発言をする人が、「もう女と付き合う機会は無い」と思っている場合に出てくる。この場合に

4) お前はおれが付き合いたい最後の女なんだ。

と言うことは、

ほかの女とは付き合いたくない

という解釈につながっていく。これに対して、さっきの英語の場合はどうだろう。否定的に解釈される場合には、おそらくつぎのよう

な推論がある。まず

彼は私が見たい最後の人だ (He is the last man I want to see)。

という発言の中には、「最後であれば彼に見たい ($p \rightarrow q$)」という含意関係が含まれている。そしてこの含意関係からはまた等価な論理的な含意関係として、

最後でなければ彼に見たくない ($\text{not } p \rightarrow \text{not } q$)

が生じてくる。

妹：公式にすると分かりやすいね。

兄：これは結局、「彼は私が一番見たくない人だ」と同じだよ。the last man の否定的な意味への広がり背後には、こういう推論の過程がありそう。このような過程をたどる意味の拡張は、上で見たように日本語の場合には難しい。つまり日本語と英語に現れてきた違いは、推論過程の違いであり、英語は「～ならば～」を「～ないならば～ない」と拡大していくことが可能なのに対して、日本語は似たような場合でも難しい、ってことだね。英語には肯定的含意関係を、否定を含む等価の含意関係に読み替えていく解釈パターンがあるってわけ。

妹：なるほどなるほど。

兄：これが仮に英語をはじめヨーロッパ語に見られる特徴だとしたらどうだろう。この観点から次に副詞の場合を考えてみよう。まずは「めったに～ない」から。英語の rarely を見るとよくわかるように、これは本来「まれだ(rare)」から派生した副詞で、「まれに～である」って意味だよ。ドイツ語もノルウェー語も「まれだ」っていう肯定表現とつながっている点で一緒だ。しかしこれらの言語では「まれに～である」は上のような推論を経て、さらに「まれでなければ～でない」という方向に広がる余地がありうる。これが語の意味として定着すると「めったに～ない」って意味をもつことになる。また「ほとんど～ない」の場合も同様。hardly は hard から派生した

副詞だから、もともとは「困難をともなあって~する」となるはず。しかしこれも上と同じ理屈で「困難をともなわなければ~しない」という方向に展開しうる。ここから出てくるのが「ほとんど~ない」というわけ。この考え方で less than の場合もいけそうだよな。「より少なくある」は「より少ないならば、ある」で、これは「より少なくなければ(多ければ) ない」すなわち「より多くはない」と広がっていく。最初のノルウェー語の例の場合も同じ。ノルウェー語の問題の部分を直訳すると「おそく忘れる(忘れるのがおそい)」となるだろうけど、ノルウェー人は上のような含意を使うことに慣れているはずなので、「遅く忘れる」「すぐには忘れない」と解釈するのが比較的簡単だろう。これを最初、おまえが挙げた日本語訳に当てはめても、言いたいことは同じだよな。

「彼らが旅に出るには銘々の理由があるが、一つの共通の目的がある。それはすぐには忘れられない何かを経験することだ。」

このようにヨーロッパ語には肯定の中に否定的な要素を見出し、それを語の意味に付け加えていく傾向があるといえる。つまりヨーロッパ語は、肯定的な含意を否定的な含意として捉えなおして語彙化する言語ともいえるね。日本語はこういったタイプとは異なり、「でなければ~ない」といった意味構造を、はっきりと形態・統語的に示す必要がある。ヨーロッパ語はその部分を含意によって覆ってしまう。でもヨーロッパ語にも日本語風のシンタックスが無いわけでもないな。例えばフランス語の

Je ne bois que du vin. 「私はワインしか飲まない」

これは「しか~ない」の場合だけど、構造的には日本語と似ているよね。que には「...のほか」の意味もあるみたいだから、そこからこういう表現の可能性が出てきたのかもね。

妹：そうか！今までの話から長年の私の疑問も解けるかも！中学生のとき、どうして英語の little と few は否定的な意味なのに、a little と a

few のように a をつけると肯定的な意味になるのか疑問に思わなかった？今の説明を参考にすると、次のようになるでしょうか。本当は little も few も「すこし」だったんだけど、「少しならある」から出てくる「少しでなければ(少し以外は)ない=ほとんど~ない」が単語の意味として定着してきた。でもやっぱり「すこし(ある)」と「ほとんど~ない」は区別したい。そのために出てくるのが不定冠詞の a なんだ。

兄：さっき話した場合も含めて、そのあたりは、実際の歴史的な過程を追ってみる必要があるけど、little なんかの場合にも、さっきの肯定的含意関係を否定的含意関係に読みかえるような傾向ときっと関係しているだろうね。これまでのことをもう一度大ざっぱに言うなら、ヨーロッパ語は「すこし」や「まれに」なんかの否定に隣接する領域の単語が、否定の意味を吸収拡大することがあるけど、日本語にはそういうことがないってこと。単語が否定の意味を吸収する傾向ってことでは、フランス語やノルウェー語のように本来の否定辞が消えて、否定の意味が本来否定の意味を持たない他の単語に委ねられていったってこととも関連しているね。

妹：そうなんだね。さてと。(時計を見る)今日はこれから友達と待ち合わせて映画を見に行くの。もう行かないと。じゃあ、ごちそうさま。

兄：え？また俺のおごり！？たまにはおまえが払えよ。

妹：また今度ね。(慌てて店を出る)

兄：って毎回言ってるけど、一度も払ったためしがないじゃないか。あいつの「また今度」っていうのこそ「否定辞が無いのに否定」なんだよな…。

(みやした ひろゆき・くぼ さやか)